九州オルレの標識

九州オルレのシンボルカラーは朱色だ。朱色は神社の鳥居の色で、日本文化を代表する色。

九州オルレでは済州オルレのようにカンセ(済州固有の小型野生馬)と矢印そしてリボンに沿って歩く。

青い矢印は正方向を、朱色の矢印は逆方向を指す。リボンは青と朱色をいっしょにして木の枝などに結んである。

平戸港交流広場 → 最教寺奥之院(1.2km) → 川内峠インフォメーションセンター(4.7km)
→ 川内峠デイキャンプ場(6.8km) → 平戸市総合運動公園(9.2km) → 赤坂野球場(9.7km)
→ シーライフ平戸(10.1km) → 平戸ザビエル記念教会(11.2km) → 正宗寺【宗陽公の墓】(11.3km)
→ 寺院と教会の見える風景(11.4km) → 平戸オランダ商館(12.5km) → 平戸温泉うで湯・あし湯(13km)

コース 距離・・・13km　　所要時間・・・・4~5時間　　難易度・・・・・ 下

平戸コース

平戸港から望む海は透き通り、停泊中の船と港口を見下ろす丘の上の建物はすまし顔の少女のように美しい。

平戸は1500年代にはすでにポルトガルやオランダなどとの商業交易が始まっていた場所で、「西の都」と呼ばれるほど豊かな歴史を持っている。

平戸は、和風の中に自然と入り込んだ西洋の趣きが漂う場所で、カメラのシャッターを切る手の休む間がない。

港口から始まるコースは、町の後ろの丘をゆっくりと登り西海国立公園の深い森に出て、約30haの広大な草原に至る。

済州のオルム(寄生火山)にそっくりの丸い丘である頂上の川内峠に立つと、息を飲むほど壮大な多島海の風景が360度広がる。

丘の上の涼しく強く吹く風に思いきり心と体を任せ、町に下りていく道から古いカトリック教会(平戸ザビエル記念教会)に続く急な坂道では、必ず後ろを振り返ってみよう。一つのフレームの中で、日本の伝統的なお寺の楼閣の上に教会のゴシックスタイルの尖塔が見える、まるで合成写真のような瞬間は見逃せない。

港口の向こう側の丘の上に見え隠れする平戸城は、トレッキングを終えたらいらっしゃいと手招きしているようだ。

異国的な港口がまた見え、こぢんまりとした親しみのある二階建ての店舗が連なる商店街で、見どころ、食べどころの探検に気を取られているうちに、いつの間にか終点のうで湯と足湯に着く。

ヨーロッパの小さな港町のような異国的な趣きと日本らしさが同居しながらも、荘厳な風景と見事に一体化するオルレだ。

1.最教寺(奥之院)

1607年、第26代平戸藩主、松浦口信により建立され西の高野山」と呼ばれています。建立以前は、真言宗の寺があったといわれ、また 806年、弘法大師が唐より帰朝のおり 護摩を焚いたり座禅などをしていたところと伝えられています。
奥の院に通じる 参道には苔むした石仏がならぶ真言宗の霊場で、2月の節分の日に行われる「子泣き相撲」で有名です。この「子泣き相撲」は江戸時代、平戸藩主を悩ませていた亡霊を赤ん坊の泣き声が退散させたことが起源とされています。
　平成元年には日本最大の三重の塔が奥の院にでき、霊宝館には鎮信公(平戸藩主第26代)寄進の文化財を中心に 国の重要文化財である絹本着色仏涅槃図(けんぽん ちゃくしょくぶつねはんず)や釈迦誕生図、十六羅漢図、釈迦涅槃像などがあり、見ごたえがあります。

最教寺の本堂

日本最大の大きさを誇る三重の塔

赤い前掛けすがたの石仏がならぶ参道

霊宝館 料金: 大人 400円

2.川内峠

平戸港の南西約3キロにあり標高267mに広がる約30haの草原。

島の峠だけに丘の上の展望所からは西にも東にも北にも海や島などが見え360度の大パノラマが楽しめます。
平戸大橋や 生月島、天気の良い日には五島列島や対馬なども見えるそうです。
ここは阿蘇やくじゅうに似た風景で、西海国立公園の平戸地域有数の展望地となっています。
また、大草原が広がるこの一帯は春には約1万2000本のヒラドツツジやハイキング、夏はキャンプ、秋のススキのうつくしい場所です。自然散策園路もあり四季折々の楽しみ方ができる場所です

ビジターセンターのそばに吉井勇歌碑があります。「山清く海うるはしとたたえつつ旅人われや平戸よく見む」と書かれています。明治40年(1907)の夏、与謝野鉄幹や北原白秋ら「5人の詩人」が、東京から九州にきて、九州の唐津、平戸、島原、天草、阿蘇などを旅して 紀行文を書きつづっていきました。その紀行文は「五足の靴」として有名です。吉井勇(よしいいさむ)はその5人の中の一人です。

頂上部の展望台

インフォメーションセンター

吉井勇歌碑

デイキャンプ場

3.平戸ザビエル記念教会

日本初の西洋への扉を開いた港、平戸には、西洋の物と一緒に宗教も錨を下ろした。

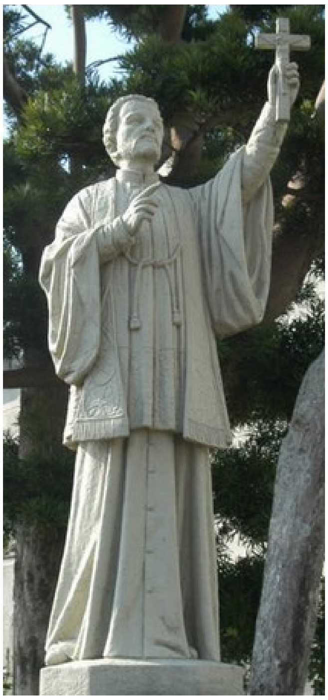
日本にカトリックを伝えた東洋の使徒、偉大な聖者として世界の人々に尊敬されている聖フランシスコ・ザビエル師の三度の平戸訪問を記念して、1931年に建築されたゴシック風のカトリック教会。

聖堂前側面に聖師の記念像が昭和46年建立されたことにより、聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂とも言われている。

日本各地から毎日多数の巡礼者、観光客が訪れている。日本では珍しいカトリック遺跡で韓国から来た信者たちの訪問も多い。

平戸ザビエル記念教会は以前上神崎教会の巡回地であったが、昭和6年(1931)4月新聖堂の落成・献堂とともに早坂久之助司教によって設立された。

現在平戸は商工、行政、教育、交通などあらゆる面において県北の中心である関係上、当教会は平戸、松浦、北松浦地区の主管教会である。



4.正宗寺（宗陽公の墓）

臨済宗の寺院で、第28代、松浦隆信/宗陽公の特別に大きな墓が建っている。宗陽公の時代には、平戸オランダ商館とイギリス商館が開設されるなど、海外貿易が栄えて豊かだった時代であり、平戸が”西の都”という名前を得ることができた時代である。

松浦隆信 (宗陽)
時代　　江戸時代
松浦 隆信（まつら りゅうしん／たかのぶ、1592年1月13日（天正19年11月29日） - 1637年7月16日（寛永14年5月24日））は、江戸時代の大名。平戸の松浦氏第28代当主。肥前平戸藩第3代藩主。曽祖父（松浦隆信 (道可)）と同名を名乗る。

第2代藩主松浦久信の長男。母はキリシタン大名大村純忠の娘ソニカ（松東院）。正室は大胡藩主・牧野康成の娘、継室は大村喜前の娘。子は松浦鎮信（長男）、松浦信忠（次男）、娘（秋月種信正室）、娘（秋山正俊正室）、娘（松浦重賢室）、娘（松浦辰純室）、娘（松浦信方室）。官位官職は従五位下、壱岐守。法号は正宗院殿前壱州大守向東宗陽大居士。墓所は平戸市正宗寺。
幼少時に父によって受洗したが、その後江戸幕府の禁教令により棄教している。

慶長8年（1603年）、父・久信の死により12歳で家督を相続、祖父・鎮信（法印）が後見した。寛永14年（1637年）没し、跡を長男・鎮信（天祥）が継いだ。
エピソード
隆信の祖父・鎮信は平戸イギリス商館や平戸オランダ商館開設に尽力した人物として、イギリスでは日本のルクルスと呼んで賞賛していたが、隆信は貿易に無理やり介入して多大な損を被らせた人物として、Foolish tono（バカ殿）という不名誉な仇名が付けられていた。

5.大ソテツ

年齢400歳の歳月を全身で見せてくれる巨大な蘇鉄木。オランダ、イギリスとの貿易華やかな頃、延命町（今の浦の町）は、川崎屋助右衛門、半田五右衛門、伊藤謀等の貿易商が軒を並べて、平戸一番の賑わいを見せていた所であった。この浦の町裏通り天満宮登り口に、大きく枝を四方に伸ばしている老ソテツは、川崎屋全盛時代に植えられたものといわれている。村一帯は江戸時代初期の最も賑やかな貿易商たちの富村だった。吉田松陰も50日ほどこの延命町に滞在したことがあり、松陰も見た大ソテツということになる。小さな村を観まわる楽しさがかなりある。

6.平戸オランダ商館

1609年に平戸港に設置され、石造り倉庫で、日本初の西洋建築を復元し、2011年9月に博物館として開館した。青く澄んだ海に隣接している白色の石造りの建物の前に立つと、数百年前の港に停泊した西洋の帆船の姿を描くのも難しくない。

料金: 大人 300円

商館を破壊され失意のうちに日本を去った最後の平戸商館長フランソワ・カロンを偲んで、坂の途中にカロンの名を冠した小さな公園があり、その片隅に日本で亡くなった平戸オランダ商館員を追悼する石碑があった。

徳川幕府はオランダ商館員が日本で亡くなっても墓地に埋葬することを禁じていた。だからこの地にオランダ人の墓はない。オランダ商館長日記には船で遺体を海底に捨てた事が記されている。埋葬を禁じた理由は、キリスト教信者の墓が潜伏するキリシタンの聖地となり、彼らの信仰心が強化されることを警戒したからだ。

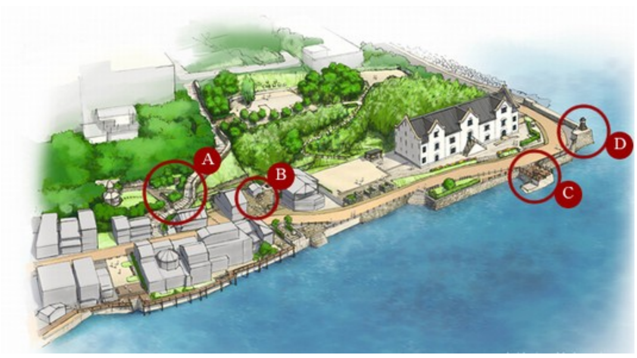
平戸港の入口右側、丸で囲った部分が、平戸オランダ商館の史跡指定地です。

遣唐使時代に庇羅(ひら)島の名で知られ、中世には倭寇(わこう)の根拠地であった平戸は、古くから海上交通の要地として知られていました。

1550年にポルトガル船が入港すると南蛮貿易の窓口となり、1609年、わが国最初のオランダ商館が開設されました。しかし、幕府の命によって、オランダ商館は1641年に長崎出島へ移されます。平戸での存続期間はわずか30年余り。

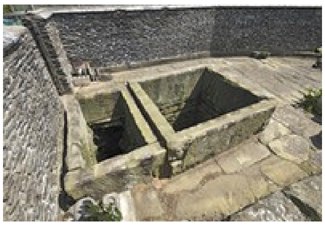
しかも、徹底的に取り壊されたため、当時の様子は跡地に残る塀や井戸からうかがい知るしかありません。

1922年、商館の跡地は、海外貿易の拠点であったという歴史的価値が評価され、「平戸和蘭商館跡」として国史跡に指定されました。1987年から始まった発掘調査によって、建物の位置や規模が明らかにされつつあります。



A オランダ塀

江戸時代初期に平戸オランダ商館が存在していたことを最も良く示す遺構です。商館主体部と市街地の間に建てられたもので、火災や難防止、住民の視界からさえぎることを目的として建設されたものです。



B オランダ井戸

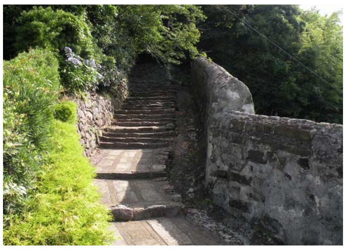
オランダ塀と共に、平戸オランダ商館を代表する現存遺構です。現在はオランダ井戸と称され、寛政4年平戸六町図には、「阿蘭川」と記されています。築造に関する記録はありませんが、オランダ関係史料に井戸の存在を確認することができます。

C オランダ埠頭

築造の年代は明らかではありませんが、1641年11月1日付の商館資産引継目録には「水門の青石造階段」とあり、ここに東インド会社所有帆船が荷降しのため、しばしば停泊していたと思われます。

D 常灯の鼻石垣

1616年、1618年、1639年の埋立てに伴う護岸として建造されています。1610年代に築造された石垣の多くは、その後さらに海側が埋立てられたため、地中に埋設していることが発掘調査により確認されています。



アーノルダス・モンタヌスの「日本誌」にある挿絵「Firando（平戸）」の左に見える坂道は、現状の写真の左に見えるオランダ塀のある坂道らしい。オランダ塀はオランダ商館が目隠しのために築いた石塀とされ今も残っている。

平戸は昔より中国大陸や朝鮮との交流の要地であった。
その昔は神功皇后の三韓の役から遣隋使や遣唐使もここから出発している。
平安時代の末期には水軍で名高い松浦党（まつらとう）が誕生し、鎌倉時代以後には平戸を根拠地として私貿易や海賊行為などを 行い、倭寇（わこう）と言って恐れられていた。

室町時代になると領主の松浦隆信（たかのぶ）は当時東シナ海から南洋諸島にかけて暴れまわっていた中国の海賊五峰王直（ごほうおうちょく）が平戸にやってきたのを大歓迎し、屋敷を与えるなどして保護した。
これを契機に中国との貿易が 盛んになっていった。

天文１９年(1550)には黄金の国ジパングをめざしていたポルトガル船が平戸に入港し、ポルトガルとの貿易が始まった。
外国との貿易で栄えた平戸は「西の京」と呼ばれるようになった。
この当時にフランシスコ・ザビエルも鹿児島から 平戸にきてキリスト教を布教している。
その後貿易相手国はイスパニア（現在のスペイン）、オランダ、イギリスと変わっていくが、 平戸は貿易港として外国の船が入港し大いに栄えていた。

しかし、江戸時代になり鎖国が完成し、外国との貿易は長崎だけに限られると平戸は海外貿易港としての地位を失っていった。
その後平戸は平戸藩6万石の城下町として、明治までこの地方の中心地の役割を担った。
今、平戸には日本初の南蛮貿易の舞台となった当時の面影を残す遺跡が市内に多く残っている。
そう広くない市内にあるので、 歩いてまわるのに丁度よい距離である。車を降りて歩いて散策されることをお勧めします。

1598年朝鮮の役で、第26代松浦鎮信法印公が出兵し、全羅道(センラ)で若い綺麗で可愛いお姫様を、人質として、連れて帰りました。 そのセンラ姫から生まれたのが、三五朗、後の松浦蔵人信正(まつうらくらんどのぶまさ)公です。

鎮信法印公の正室は、西郷純堯の娘、恵仙夫人です。その嫡男は、第27代松浦久信公です。

久信公は、1602年に,32歳の若さで亡くなりましたので、その嫡男が13歳で後継ぎになり、第28代松浦隆信宗陽公でした。

亡くなった久信公の正室は、キリシタン大名大村純忠公の五女の松東夫人でした。松東夫人は、キリシタンだったので、1612年キリシタン禁令が発布されたので、蔵人信正公は、鎮信法印公に進言し、平戸松浦藩は、キリシタンでないことの証しとして、平戸(日の岳)城を焼き払いました。その翌年、鎮信法印公は亡くなりました。蔵人信正公は、1616年、唐津の波津姫と結婚しました。
1637年、第28代松浦隆信宗陽公がなくなりました。第29代松浦鎮信天祥公が16歳で、後継しました。
松浦蔵人信正公は、幕府に対して、宗陽公のお墓を大きく建てて、キリシタン大名ではないことの証しとしました。お寺は、平戸の正宗寺(しょうじょうじ)にあります。大きいです。

その当時、お殿様が亡くなれば、家来が殉死する習わしがあり、家来の針尾伊賀守の子孫の浮橋主水(うきはしもんど)は、殉死しませんでした。 それどころか、幕府に平戸藩は、キリシタン大名であると、訴えました。

1639年、浮橋主水と蔵人信正の義理父熊沢大善との対決が、幕府であり、江月和尚の平戸検分等により、キリシタン大名ではないことが、証明され、浮橋主水は、島流しになりました。

こうして、第29第松浦鎮信天祥公は、幕府からのお取りつぶしにならなくて、安堵しました。

しかし、1641年、平戸のオランダ商館は、閉鎖され、この時、平戸には、混血児が数百人いました。
この混血児は、ジャワ島のバタビアに移送され、コルネリアやコショロたちは、「日本こいしゃ　日本こいしゃ　日本こいしゃ」と、ふるさと日本に帰りたいと、ジャガタラふみを送っています。

幸橋（オランダ橋）

平戸港にそそぐ鏡川に架かるアーチ形の石橋。オランダ商館建築に携わった石工の技術で架けられたため、通称オランダ橋と呼ばれている。

崎方公園

フランシスコ･ザビエル記念碑や三浦按針の夫婦塚などがある公園。平戸ツツジの名所としても有名。平戸港が一望できる展望デッキがあり、夜はライトアップされる。

松浦史料博物館

明治26（1893）年に建てられた旧平戸藩主の住居を利用した博物館。館内には1700年製の地球儀、オランダ船の錨など松浦家ゆかりの品々を展示している。

梅ヶ谷津偕楽園

三十五代平戸藩主松浦熙の別邸。当時の建物や庭園、熙直筆の書、茶道具などを展示している。御用窯の中野焼と三川内焼の茶碗や皿など200点ほどが見られる。国の登録文化財。

入園料 400円

平戸城

平戸の青い海を望む小高い丘の上にそびえる平戸城。

現在は平戸のまちを一望できるスポットとして、また平戸藩時代の資料館として、だれもが訪れる観光の拠点となっています。

現在城が建っている場所には、1599年、松浦家第26代法印鎮信が日ノ岳(ひのだけ)城を築きましたが、徳川家の信任を得るために自らその城を焼き捨てるという歴史がありました。

その後の鎖国政策で、西洋貿易の利を失った平戸藩は、天祥鎮信の時代、内政に力を注ぐ一方、兵学者・山鹿素行(やまがそこう)と親交を深め、城の再建に尽力しました。

1718年に完成した平戸城は山鹿兵法を体現したもので、日本唯一の山鹿流兵法で築城した城。平戸瀬戸を自然の要塞に見立てた海城の性格を持っています。

経済的な繁栄が藩を支えるとの考えから、城下は港を中心に商人を集めて町屋を作り、武家屋敷は山手に集めるという独特のつくりになっており、今も当時の形状をとどめています。また、松浦氏と縁の深い寺院も数多く点在。古き町並みを味わいながら寺院をめぐると、城下町としての平戸の魅力を堪能することができます。

明治４年の廃城まで藩主の居城であったが、その後は荒廃し、わずかに北虎口門と狸櫓が残っていた。それを昭和３５年から天守閣を始め、各櫓の復元に着手し昭和３７年に完成したのが現在の城である。天守閣内部には国の重要文化財に指定されている『環頭の太刀』や松浦藩資料や武具、隠れキリシタン資料などが展示されている。

・営業時間 : 8時30分～17時30分

・休業日 : 特定日以外は無休

・入場料 : 大人500円

■勝尾岳城概要

勝尾岳城は、江戸時代に肥前松浦藩六万石となる松浦氏が代々居城としたお城だ。だいたい南北朝時代から戦国時代末期の約百八十年間のことだ。
松浦氏の居城としては、平戸に移ってはじめが館山、次が勝尾岳城、朝鮮役ののち日の岳城、江戸時代に入って中の御館、御館と変遷を重ね、十八世紀に入ってから平戸城（亀岡城）へと移った。
松浦は今では「まつうら」と読むが、昔は「まつら」といった。その由来は古く、気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと＝神功皇后）が新羅征伐に出征するまえ、このあたりで年魚（あゆ＝鮎）を釣りあげ、「めづらし」と仰せになったので、希見国（めづらのくに）といったのが、のちに訛って松浦（まつら）になったという。（肥前国風土記）
また、魏志倭人伝（ぎしわじんでん）には、倭（わ＝日本）に上陸する場所が「末盧国」とされている。「まつろこく」あるいは「まつらこく」と読むのだろう。これが、松浦のことだとする説がある。これについては、邪馬台国大和説を信じる方々は賛成しないかもしれないが、冷静に考えて、松浦だろう。
さて、松浦氏の出自に関しては、従来より二つの説がある。「安倍宗任末孫説」と「嵯峨天皇末孫説」だ。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
「安倍宗任末孫説」というのは、前九年の役（ぜんくねんのえき）で敗れた安倍宗任（あべのむねとう）が九州へ流され、その子孫が松浦に残り、これが松浦氏になったというものだ。この「安倍宗任末孫説」については、古く鎌倉時代後期に成立した「平家物語」の写本のひとつ、屋代本にあるという。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」、安川浄生氏「宗像の歴史」、伊藤篤氏「福岡の怨霊伝説」）　余談だが、その四十四代目の子孫が安倍晋三（あべしんぞう）元首相だそうだ。（安川浄生氏「宗像の歴史」）
一方の「嵯峨天皇末孫説」は、第五十二代嵯峨天皇（さがてんのう）の第十八皇子・融（とほる）が源姓を賜って源融（みなもとのとおる）と名乗ったことに始まり、昇（のぼる）、仕（つかう）、充（みつる）、綱（つな）とつながり、綱が主君の源頼光（みなもとのよりみつ）の肥前守下向に従って松浦あたりに下ったことで縁ができた。綱（つな）の子・授（さずく）は肥前奈古屋（なごや＝名護屋のことだろう）に住み、奈古屋次郎太夫（なごやじろうたゆう）と称したが、のちに京へ戻り内舎人（うちとねり）となった。その子・泰（やすし）は摂津渡辺に住み後三条院に仕えた。泰の子が久（ひさし）である。源久（みなもとのひさし）は延久元年（1069）に松浦郡の宇野御厨検校（うのみくりやけんぎょう）となり肥前国松浦の今福（いまふく）に下向した。久は今福村に梶谷城（かじやじょう）を築いたという。これが松浦氏の起こりとされている。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
この両説はどちらが事実か容易に判断つかないが、両方とも事実なのではないだろうかと考えている。
さて、源久（みなもとのひさし＝松浦久まつらひさし）のあとは、文字通り八の字のごとく一族が叢生していく。
久は子供たちにそれぞれ所領を分け与え、それぞれが松浦一族の祖となっていく。久の長男・直（なおし）には御厨（みくりや）を、二男・持（たもつ）には波多（はた）を、三男・勝（まさる）に石志（いしし）を、四男・聞（きこう）に荒久田を、五男・広（ひろし）に神田、六男・調（しらぶ）に佐志（さし）、養子・高俊（たかとし）に牟田部を、それぞれ与えた。ここで、養子の高俊というのが例の安倍晋三元首相の祖先なのだそうだ。
御厨を継いだ直（なおし）も自分の子に所領を分け与えていく。第一子・頼は京へ行き、その後不明。第二子・清には今福・志佐（しさ）・相浦・佐世保・壱岐の一部などを与え、この子孫がのち相神浦（あいこうのうら）松浦氏になっていく。そのほかに直は、第三子・栄（さかう）には有田を、第四子・遊（あそぶ）には大河野を、第五子・披（ひらく）には江迎・佐々・平戸を、第六子・囲（かこむ）には伊万里・山代、第七子・彊には八並、第八子・連（つらぬ）には値賀を、それぞれ与えたという。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
ただ、それぞれが各氏の始祖になったというよりも直が子供たちを現地の豪族に次々と養子に入れたという説もある。（神尾正武氏「松浦党戦旗」）
直の子のなかで清が今福の地を譲られているので、松浦氏の嫡子ということになるが、松浦一族の特徴としては、惣領が松浦一族の中心的存在というわけではなく集団で行動することが多い。世にいう「松浦党（まつらとう）」だ。のちに松浦党には、もともと松浦一族でない青方氏や宇久氏なども加わっていくようになる。
さて、直の第五子・披（ひらく）は峯（みね）氏を称し、これがのちの平戸城主・松浦氏へとつながっていく。ただ、峯（みね）の地がどこなのか、よく分からないそうだ。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
ただ、神尾正武氏は峯の地を明確に伊万里としている。現在の伊万里市のなかに山代町峰という地名がある。（神尾正武氏「松浦党戦旗」）
さて、峯披（みねひらく）は、建久三年（1192）六月二日、肥前国宇野御厨（うのみくりや）のうち紐差浦（ひもさしうら）の地頭職を幕府から安堵されている。紐差は平戸島の中部にある。また、披は建保六年（1218）、子の三郎上（のぼる）に伊万里浦・福島・田平のうちの粟崎などを譲っている。そして、上の兄である持（たもつ）には、披の弟・松浦十郎連（つらぬ）が小値賀島（おぢかとう）を承久元年（1219）に譲り、二年後の承久三年（1221）五月、幕府は持に対して小値賀島地頭職を安堵した。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
こうしてみると、伊万里から平戸、小値賀にかけて所領が点在していただろうと推測される。
ということで峯持は小値賀にいたわけだが、のち嘉禄元年（1225）頃平戸へ移り、館山に居を構えた。館山城と呼んでいる本もある。居館をおいた館山は、今の博物館の裏山だという。勝尾岳とは別の山だ。この峯持の系統が平戸松浦氏へとつながっていく。持のあと、繋（つなぐ）、湛（たたう）、答（ことう）とつづき、答のころに蒙古襲来があった。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
峯答も文永の役は博多で戦い、弘安の役では「北肥戦誌」に壱岐や鷹島で奮戦したとあり、石築地構築にも参加したという。（新人物往来社「鎌倉・室町人名事典」）
答の子・定（さだむ）は武勇の人で、元弘三年（1333）鎮西探題（ちんぜいたんだい）を討ち、新田義貞に従って箱根で足利尊氏と戦い、「鬼肥州」と呼ばれた。のち尊氏が入京したときは、比叡山に難を逃れた後醍醐天皇を守って、錦袴の断片を賜ったという。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
定の跡をつぐのは弟の勝（すぐる）で、勝は多々良浜合戦で尊氏に属したため引輌の旗章を受けたという。例の菊池勢の搦め手で寝返った松浦党の一人だったのだろうか。兄・定が天皇方、弟・勝が尊氏方だった。九州から東上した尊氏は、比叡山へ逃れた後醍醐天皇と講和を成立させ、天皇を京へ迎えた。このとき、天皇のそばにいた将士は捕らえられているが、峯定は難を逃れ平戸へ帰っている。このときに定から勝への代替わりがあったのかもしれない。峯勝（みねすぐる）は北朝に仕えて滝口に補され、のち肥前守に任ぜられた。そして峯勝が勝尾岳に白狐山城（びゃっこさんじょう＝勝尾岳城）を築いたといわれる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

勝尾岳は平戸市の中心部にある標高68mの小山で、今では「宗陽公の墓」のある正宗寺がある。平戸で観光地図を入手すると、だいたい「勝尾岳」と書いてあって分かりやすい。ただ、城跡だったとはどこにも書いていない。ところで、峯勝が勝尾岳城（白狐山城）を築いたころは、まだ亀岡城（現在の平戸城）はなかった。勝尾岳城は、それまでの居館・館山城から700mくらい南に位置している。峯勝は居城を館山から勝尾岳城へ移したといわれている。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
その後も松浦党は、他氏と同様あるときは北朝方、あるときは南朝方と立場を変えて生き残っていく。大宰府に入り勢力を強める九州の南朝方に対し、幕府は今川了俊（いまがわりょうしゅん）を九州探題として送り込んだ。了俊は子息・義範（よしのり）を豊後に、弟・仲秋（なかあき）を肥前に送り込み、自らは豊前から中央を進軍した。今川仲秋は応安四年（1371＝建徳二年）十一月十九日、肥前の呼子（よぶこ）から上陸し、仲秋のもとには肥前の将士が相次いで来会した。（川添昭二氏「今川了俊」）
このとき、峯勝（みねすぐる）も仲秋のもとに参じたという。このあとは松浦党は北朝方であったようだ。永徳四年（1384＝元中元年）、嘉慶二年（1388＝元中五年）、明徳三年（1392＝元中九年）などしばしば一揆を結んでいる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
ただ、よく分からないのは一揆の契約状に勝の名前が出てこない事だ。永徳四年（1384＝元中元年）の契約状には、「ひらと源湛」とある。ここは源勝となるべきではないだろうか。勝は途中で改名したのだろうか。あるいは、当主でないものが署名しているのだろうか。それとも、古いことなので記録に錯綜があって、この頃の平戸家は「湛」が当主だったのだろうか。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
ほかの年次でも、嘉慶二年（1388＝元中五年）は平戸肥前守湛、明徳三年（1392＝元中九年）は平戸若狭守廣、とあって勝ではない。ここで、平戸湛は永徳四年一揆状の「ひらと源湛」と同一人物だろう。また肥前守ということは平戸家の当主と考えられる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
一方、平戸若狭守廣の名は永徳四年（1384＝元中元年）の一揆契約状に、平戸の「おうの若狭守広」、という名がみえ、関係がありそうだ。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
勝は応永年間（1394-1428）のはじめ頃、没した。跡を継いだのは、先代・定の子、理（おさむ）であった。理も肥前守に任ぜられたが、このころ肥州太守という人物が朝鮮へ使いを派遣しており、これが理のことと考えられている。理の跡を継いだのは、理の先代・勝の子、直（なおし）だ。直ははじめ薩摩守だったが、理の嗣子となってのち肥前守に任ぜられた。このあたり両統迭立の感があるが、直の跡は子の勝（すぐる）が継いだ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
このころは朝鮮への通交が活発なころであったが、平戸氏はむしろ出遅れていて、積極的な通商を行っていたのは、田平（たびら）氏や志佐（しさ）氏であったそうだ。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
松浦一族内には、志佐（しさ）氏と佐志（さし）氏があって、全く別の系統であるが名前が似ていてヤヤコシイ。もちろん両方とも地名からきているものだ。
この頃の朝鮮通交では、同一人物の名前で五十年も六十年も通交を重ねている例があり、名義だけ利用した偽使と考えられている。また、日本へ連れ去られた朝鮮人を送還して礼物を受けるなどしており、倭寇との関連性が考えられる。
勝の跡は子の芳（よし）が継いだ。芳の治世、永享六年（1434）に宇久大和守基と生月（いきつき）の豪族・加藤景明の連合軍は勝尾岳城（白狐山城）を包囲した。さらに、生月の加藤氏・一部氏・山田氏、下方の紐差氏、津吉の津吉氏などが攻城軍に加わったところ、平戸氏先代の勝が戦死、さらに当主・芳も陣没した。風前の灯となった平戸氏であったが、大島の豪族・大島伯耆守応と胤政父子は、芳の弟で田平峯氏を継いでいた峯義（みねよろし）を奉じて平戸の勝尾岳城（白狐山城）の包囲軍を追いやり、城を回復した。義は平戸へ帰り家督を継いだ。田平の峯氏は義の長男・弘（ひろむ）に継がせた。
義は父の仇を討つため、まず紐差氏を攻めてこれを下した。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
これが平戸松浦氏の押領（おうりょう）のはじめだという。なお、芳（よし）のころまでの平戸氏は、松浦党のなかでも振るわなかったようで、所領も平戸とその周辺、および小値賀島のみだったようだ。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
こうして平戸氏を継いだ義（よろし）であったが、無官であったことから官位を得ようと永享七年（1435）上洛した。しかし、なかなかその機会がなく、三年が過ぎた。永享九年（1437）三月、将軍・足利義教（あしかがよしのり）が石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう）を参詣した際、赤い烏帽子をかぶって出仕したことで義教の目にとまり、それがきっかけで義教の側に仕えるようになったという。のち義教は赤烏帽子姿の義の肖像画を描かせて義に贈ったといわれ、それが松浦史料博物館に現存しているそうだ。義（よろし）は義教に相当かわいがられていたようで、ずっとのちの長禄四年（1460）になって、以前からの約束ということで勘合貿易を許されている。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
ひょっとすると、義（よろし）の名は義教から賜ったものかもしれない。というのは、将軍のそばに仕えて、しかも名前に「義」の字がある、というより「義」一字というのは、憚りがあるように思えるからだ。しかし、偏諱なら「教」の字を賜りそうな気もするので、案外、平戸に戻ったのちに勝手に名乗ったものかもしれない。
それはともかく、義が将軍義教のもとから平戸へ戻ったのがいつであるか不明であるが、嘉吉元年（1441）義教が赤松満祐に暗殺される（嘉吉の変）と、檄を受け東上した。しかしながら、満祐がすでに討たれたことを知り、剃髪して「天叟（てんそう）」と名を改めた。天叟は第二子の豊久（とよひさ）に家督を譲り隠居した。なお、第一子・弘（ひろむ）には上述のように、自身が一旦は養子となっていた田平・峯氏を継がせている。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）
ということで、豊久が平戸氏を継いだわけだが、彼は松浦党のなかでは珍しく「二字名」だ。父・義が中央（都）暮らしの経験があるためだろうか。豊久は朝鮮との貿易を積極的に行っていて、康正二年（1456）や文明三年（1471）に朝鮮から図書（ずしょ）を受けている。実兄の田平弘（たびらひろむ）もまた朝鮮との交易に力を入れたようだ。
文明四年（1472）、貴志岳城（岸岳城）主の波多下野守泰（はたしもつけのかみやすし）が不意に壱岐を襲い、佐志（さし）・呼子（よぶこ）・鴨打（かもち）氏らを一掃し壱岐を占領した。波多泰は壱岐には家臣の日高氏を亀丘城（かめのおじょう）に置いてこれを領有した。この事件はずっとのちに平戸氏に関係してくる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

豊久が没すると二男・弘定(ひろさだ)が跡を継いだ。豊久の長男・昌(さかえ)は、田平弘(たびらひろむ＝峯弘みねひろむ)に子がなかったので養子に出していた。田平弘は上述のとおり平戸豊久の兄だ。豊久といい、先代の義といい、長男に田平家、二男に平戸家を継がせているのは、田平家のほうが朝鮮通商も積極的で、ということは財力もあったということで、平戸家は何かと振るわなかったという事情と関係があるように思える。田平家が本家、平戸家が分家という印象を受ける。

弘定は文明十五年(1483)平戸島西部の津吉(つよし)氏を攻め、これを押領したため、生月(いきつき)の諸氏は皆おそれて所領を弘定へ差し出した。津吉氏は永享六年(1434)白狐山戦の仇敵であり、生月の諸豪族が勝尾岳城(白狐山城)包囲戦に参加していたことによるものだろう。こうして生月は平戸領となった。

ところで、田平家を継いだ昌(さかえ)であったが、義父・弘とはソリが合わなかったという。弘は、田平領を養子・昌(さかえ)ではなく甥の弘定に譲ると遺言したため、田平昌(たびらさかえ)と平戸弘定(ひらどひろさだ)の兄弟の争いとなった。文明十八年(1486)のことという。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」)

その後、兄弟の対立は激化していき、いよいよ一戦交えるところまでいった。そのとき、弘定の重心・大島筑前守胤政(おおしまちくぜんのかみたねまさ)が田平昌を説得し、刃を交えることなく昌(さかえ)は田平の里城(さとじょう)を退去し落ち延びた。大島胤政が兄弟間の争いを憂慮したことと、胤政の子・首道が田平方についていたことが動機らしい。また、平戸方は津吉や生月を領有しており優勢だったうえ、波多氏まで味方について戦力差が大きかったという。こうして、田平と江迎(えむかえ)の地は平戸氏の所領となった。(外山幹夫氏「肥前松浦一族」)

里城を去った田平昌は海路、高来郡(たかきぐん)の有馬貴純(ありまたかずみ)を頼った。数年後、延徳三年(1491)田平昌は有馬貴純の支援のもと、大村純伊、相神浦定(あいこうのうらさだむ)、および佐々(さざ)・志佐(しさ)の兵とともに平戸の弘定を攻めた。弘定は勝尾岳城(白狐山城)を出て箕坪城(みのつぼじょう)に籠もった。しかし籠城三ヶ月ののち、海路ひそかに脱出し、筑前国箱崎の金胎寺に逃れた。平戸は田平昌(たびらさかえ)の領有するところとなり、昌は田平へ戻った。このとき有馬貴純の偏諱を受け純元(すみもと)と名を改めたという。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」、外山幹夫氏「肥前松浦一族」)

この戦功によって有馬貴純は少弐政資(しょうにまさすけ)から肥前白石・長島(現佐賀県武雄市)を与えられ、これが有馬氏興隆の礎となったという。(外山幹夫氏「肥前有馬一族」)

ところで、筑前へ逃れた弘定は山口の大内政弘(おおうちまさひろ)を頼った。翌年、大内政弘の調停により弘定は平戸へ帰り、弘定が平戸および田平を領有すること、および昌(純元)の子・興信を弘定の娘と婚姻させ弘定の嗣子とすることで兄弟間の争いは決着した。峯昌(田平純元)は志佐氏を継いだ。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」、外山幹夫氏「肥前松浦一族」)

なお、弘定が二字名なのは、大内政弘の偏諱を受けたためという。ということは、弘定はもともと「定」だったということになる。(外山幹夫氏「肥前松浦一族」)

また挿話として、弘定が箱崎金胎寺にいたときに明応元年(1492)の正月を迎えたが、そのあたりは若松を切ることを禁じられていたため、代わりに椎の木で門松をたてた。以来、今日に至るまで松浦家では正月は椎の木で門飾りを行うそうだ。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」)

平戸へ復帰した弘定は、報復に佐々を攻撃しようとしたが、佐々刑部(佐々勝あるいは拵とも)は娘に弘定の弟・頼を迎え弘定に下った。同様に、佐々一族の紫加田氏や大野氏も弘定の弟をそれぞれ迎えて臣従したので、弘定は戦わずして佐々および吉田を領有した。ここで、大野氏とあるのは、上述の永徳四年(1384＝元中元年)の一揆契約状にある「おうの若狭守広」と関係があるのかどうか気になるが、分からない。

明応二年(1493)大村氏・龍造寺氏連合軍が直谷城(なおやじょう)を攻めたので、直谷城主・志佐純昌は城を捨て二人の子とともに五島へ逃れた。直谷城には峯昌(みねさかえ＝田平純元)が入った。純元が志佐氏を継いだのはこのときのことだろうか。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」)

さて、佐世保の西、相神浦(あいこうのうら)には松浦丹後守政(まさし)がいた。相神浦の松浦氏は、初代・久ー直ー清・・・と続き今福を領有しており、たぶんこれが元々の松浦氏本家だろう。松浦政は大智庵城(だいちあんじょう)に住み、相浦、有田、今福、佐世保などを領していた。あるとき、政の家臣・山田四郎左衛門が平戸弘定のもとへ内応を申し出た。弘定にとっては、政の父・定は箕坪籠城戦での怨敵であったためこれを受け入れ、明応七年(1498)大野源五郎を総大将として大智庵城を攻撃したところ、政(まさし)は討たれ城は落ちた。政の妻と息子・幸松丸は捕らわれの身となった。政の妻は少弐政資の娘(「肥前松浦一族」では少弐高経の娘)という。のちに幸松丸は逃れて平戸氏と争うようになる。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」)

その間、明応八年(1499)五島の宇久囲(うくかこむ)は家臣・玉ノ浦納(たまのうらおさむ)に叛かれて自刃したので、囲の妻と息子・盛定(もりさだ)は平戸へ非難してきた。囲の妻が平戸弘定の娘であったためだ。のちに盛定は五島に復帰する。また、永正四年(1507)大内義興(おおうちよしおき)が足利義稙(あしかがよしたね)を奉じて上京する檄にこたえ、嗣子・興信(おきのぶ＝田平純元の実子で弘定の婿)に兵を与えて京へ派遣したという。このように、平戸弘定は武威の人であった。

弘定の最晩年、永正五年(1508)人質としていた相神浦松浦政の子・幸松丸が今福の歳の宮(としのみや)参詣の際に遺臣たちに奪回される。幸松丸はのちに相神浦親(あいこうのうらちかし)と名乗り、飯盛城(いいもりじょう)を築いて平戸氏と争うようになる。この年に弘定は家督を興信に譲り隠居した。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」)

松浦興信(まつらおきのぶ)は、峯昌(みねまさし＝田平純元)の長子で、平戸弘定の娘・布袋(ほてい)と結婚し弘定の嗣子となっていた。弘定には男子がなかった。また、興信の名も二字名だが、これは大内義興(おおうちよしおき)の偏諱を受けたという。

永正十年(1513)、興信は十五年前に平戸へ逃れてきていた宇久盛定(うくもりさだ)のため大野五郎に兵を預けて五島を攻めさせ、玉ノ浦納を破って宇久盛定を家督に復活させた。盛定は謝礼に上五島の浜ノ浦、中五島の塩釜などを興信へ贈り、平戸氏は五島にも領地をもった。(松浦史料博物館「史都平戸ー年表と史談ー」)

また、興信は永正十年（1513）直谷城を攻めた。直谷城は興信の父・志佐（田平）純元から二男の純次（すみつぐ）が継いでいた。（新人物往来社「日本城郭体系17」）

つまり興信は弟を攻めたわけだが、その顛末はというと、純元は直谷城を二男・純次に継がせ、五男・純忠に深江氏を継がせて江迎の地を与え、同時に自身の隠居所とした。純元は純忠に対し、志佐純次に従うようにとしていたが、純忠は松浦興信に与した。そのため、興信と純次は不和となり、興信の直谷城攻めへと発展したという。のちに興信と純次は和睦したが、興信は江迎を押領した。ほかにも、興信は妻・布袋の死後、上松浦の波多下野守盛の娘を後妻に迎えたが、彼女は壱岐の「河北中の郷両所」を化粧料として持参した。壱岐にも所領を得たわけだ。また、興信は大内義興に従って安芸国に出陣し、恩賞として筑前国の内林というところに百町の所領を得たという。こうして平戸氏は所領を拡大し続け、発展の基礎をつくった。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）

ほかにも、天文三年（1534）大内氏と龍造寺氏との和睦の仲介役も果たしたそうだ。近隣諸勢力にとっても松浦氏（平戸氏）は、重きをなしていたということだろう。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

この間の享禄元年（1528）松浦興信は勝尾岳城を改修、拡張したという。このとき、肥前および筑後のものが城の東と西にそれぞれ空堀をつくったので、肥前堀、筑後堀と呼ばれている。（新人物往来社「日本城郭体系17」）

そして、興信の第一子が松浦隆信（まつらたかのぶ）だ。この隆信のときに、もっぱら松浦氏を称するようになるという。ただ、その地位継承は円滑にはいかず、天文十年（1541）父・興信の死にあたって隆信は十三歳であり、老中たちは別のものを家督に押したが、籠手田安昌（こてだやすまさ）が隆信を推し家中の反対を押し切って家督継承を実現させたという。したがって、隆信は生涯、籠手田安昌・安経父子に配慮しなければならなかったという。籠手田安昌は田平栄（さびらさかえ）の子で松浦一族だ。ちなみに隆信の母は、興信の後妻・波多盛の娘である。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）

隆信も海外貿易に意を用いた。天文十一年（1542）明（みん）の五峯王直（ごほうおうちょく）を平戸の勝尾岳東麓に住まわせたという。王直は明の大貿易商で、密貿易のボスで、海賊の巨魁、倭寇の頭目であった。平戸を根拠地として明だけでなく遠くルソンやシャム、マラッカへも密貿易の手を広げ、また明の沿岸部を掠奪したという。その倭寇行為は褒められたことではないが、京、堺あたりの商人も平戸へ集まるようになり、町は栄えたそうだ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

こういう流れの中で、のち天文十九年（1550）ポルトガル船が平戸へ入港する。王直がドワルテ・ダ・ガマの船を手引きしたものという。隆信はこれを歓迎し、貿易とセットのキリスト教布教も認めた。同年（天文十九年＝1550）八月、フランシスコ・ザビエルが平戸へやってきた。ザビエルは前年（天文十八年＝1549）日本へ渡り薩摩へ上陸していた。松浦隆信はザビエルを歓迎し伝道を許可した。ザビエルは平戸に一ヶ月間滞在し、山口を経て京へ向かう。平戸にはパードレ・トルレスを残した。ザビエルは翌天文二十年（1551）三月、大内氏への献上品を準備するために一旦、平戸へ戻った。ザビエルと平戸の関係はここまでで、その後はガスパル・ビレラなどが布教にあたった。しかし、ガスパル・ビレラの布教は熱心、というより強引で、お寺から仏像や経典を勝手に持ち出して浜辺で焼いたりした。そのため僧侶や仏教徒の反感を買い、籠手田安経が隆信に謀叛を企てているという中傷がなされた（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）。

籠手田安経（定経）は隆信のすすめで弘治三年（1557）、弟の一部勘解由（いちぶかげゆ）とともにキリスト教に入信していたため、仏僧らの怨嗟の的となったのだろう。領内が不穏になったことから松浦隆信は永禄元年（1558）ガスパル・ビレラを領外へ追放した。ところが、その翌年のポルトガル船は平戸に宣教師がいないことを理由に入港せず、宣教師の召還を求めた。隆信はやむなく博多からパードレ・バルタザール・ダ・カーゴを迎えた。ポルトガルとの貿易は順風満帆というわけにはいかなかった、ということだ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

それでも平戸はポルトガル貿易の拠点であり続け、永禄四年（1561）には一年間に五艘ものポルトガル船が平戸に入港した。平戸にとってポルトガルとの貿易の最盛期だった。そのなかで、両者の関係を一気に悪化させる大事件が起こる。「宮ノ前事件」だ。永禄四年（1561）、平戸の七郎宮前においてポルトガル人と日本人の間で貿易に関して争いが起こり、ポルトガル船の船長以下十四名が日本人により殺害された。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」）

この事件は、フロイスによると、数名のポルトガル人が貿易品の布地のことで一人の日本人と争いになった。ポルトガル側は総司令官・フェルナン・デ・ソーザが駆けつけたが、日本人の武士達はポルトガル人に対して非道かつ残虐な態度で臨み、ついに総司令官および十三名が殺害された、と報告されているそうだ。一方、日本側の資料では、喧嘩の仲裁に入った日本人を、言葉の通じないポルトガル人は加勢にきたものと勘違いし先に剣で傷つけたため、侍たちが激昂して相手全員を殺した、となっているという。記述に食い違いがあり、事実はよく分からない。（川崎桃太氏「フロイスの見た戦国日本」）

この事件についてポルトガル人側は、松浦隆信に対して謝罪と善後措置を求めたが、隆信は座視したのでポルトガル人たちは大いに憤慨した。彼らは、隆信が貿易のためのポーズとしてキリスト教を歓迎しているような態度をとっているだけであることを以前から見抜いていたともいう。また、隆信の嫡子・鎮信（しげのぶ）はあからさまにキリスト教を嫌っていた。トルレスや修道士アルメイダらは、大村純忠（おおむらすみただ）の領内、横瀬浦（よこせうら）に目をつけ測量し、また純忠にたいして純忠がキリスト教に改宗すれば貿易の利が得られると説得した。純忠はこれを歓迎した。翌永禄五年（1562）ポルトガル船がやってくると、トルレスはこれが平戸に入港するのを阻止し、大村領の横瀬浦へ寄港させた。そして永禄六年（1563）五月、大村純忠は洗礼をうけ、ドン・バルトロメウと称した。日本で最初のキリシタン大名の誕生である。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」、山川出版社「長崎県の歴史」）

かし同年七月、大村氏の家臣・針尾伊賀守貞治が武雄の後藤貴明（ごとうたかあきら）と結び大村純忠に叛旗を翻し、純忠を追い出した。大村純忠は、実は有馬晴純（ありまはるずみ）の二男であり大村純前（おおむらすみさき）の養子となったものであって、これに先立って純前の実子・又八郎は後藤純明の養子に出されており、これが後藤貴明である。一旦逃れた純忠は有馬氏の援助を得てほどなく領主に復帰したが、この謀叛の際、横瀬浦は焼き討ちされていた。（外山幹夫氏「肥前松浦一族」、新人物往来社「戦国人名事典」）

このため翌永禄七年（1564）のポルトガル船はふたたび平戸へ入港した。喜んだ松浦隆信は勝尾岳東麓に天門寺（御孕みのサンタマリア）という教会を建造した。これが平戸における天主堂のはじめだそうだ。天門寺の場所は、かつての王直屋敷跡のあたりだそうだ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」、外山幹夫氏「肥前松浦一族」、天門寺跡現地案内板）

しかしながらポルトガル人たちは、なおキリスト教に入信しようとしない隆信に対して不満があり、その翌年永禄八年（1565）のポルトガル船を大村領の福田港へ入港させた。隆信は侮辱されたと大いに怒り、福田港を攻撃した。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

そのころ平戸港へ来ていた堺の商人の大船、八艘から十艘と同盟し、七十艘の小船とともに武装船団を編成し福田港を襲撃した。戦闘は二時間に及び、油断していたポルトガル人であったが、たまたまマラッカの司令官の乗るガレオン船が福田港にいて、この大砲が松浦方の大船三艘を撃破したこともあり、松浦勢は退却した。ポルトガル人の死者八人、松浦方は八十人の戦死と百二十人の負傷者を出したという。（川崎桃太氏「フロイスの見た戦国日本」）

こうして平戸のポルトガル貿易は終わっていく。以降、元亀元年（1570）までは福田港が貿易港として栄え、福田港が波浪がはげしかったため大村純忠の許可を得て、翌年元亀二年（1571）からは長崎に港が開かれた。当時、長崎の地は純忠の家臣・長崎甚左衛門純景（ながさきじんざえもんすみかげ）の領地で何もなく、葦原や砂洲にキリシタンの町が建設された。（山川出版社「長崎県の歴史」）

さて、貿易関係はひとまず置いておいて、松浦隆信の近隣との争いについてみてみよう。

相神浦親（あいこうのうらちかし）との争いは隆信の時代に本格化したようだ。王直が平戸へ住居をかまえた天文十一年（1542）、隆信は親の所領である鷹島および今福を攻め、翌天文十二年（1543）に飯盛山城を攻めたてた。このときは有馬氏が仲介に入り、鷹島を隆信へ譲ることで和議が成立した。しかし、親は有馬氏から養子・盛（さかう）を迎えて隆信に対抗した。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

当時の有馬氏の家督は、修理大夫有馬晴純（ありまはるずみ）だ。有馬氏の全盛期を築いた人物で、晴の字は将軍足利義晴（あしかがよしはる）の偏諱を得たものという。晴純は積極的な政略家で、嫡男・義貞（よしさだ）へ家督を譲ったほかは、その弟・純忠は大村家を、直員（なおかず）は千々石（ちぢわ）家を、盛は上述のとおり松浦相神浦家を、末子・諸経（もろつね）は肥後天草の志岐（しき）家をそれぞれ相続した。（外山幹夫氏「肥前有馬一族」）

一旦和睦した松浦隆信と親であったが、永禄六年（1563）隆信は海陸から飯盛山城を攻めた。飯盛山城の守りは堅く落城させることはできなかったが、このあいだに隆信は有馬・大村勢と針尾に戦うなど早岐（はいき）、針尾（はりお）を手に入れた。万策尽きた親は養子・盛を有馬へ帰し、永禄八年（1565）自ら平戸へ出向いて降伏した。その証として隆信の三男・親（ちかし）を養子としたわけだが、親（ちかし）の養子が親（ちかし）ということで、まことにヤヤコシイ。これにより、相神浦は平戸松浦氏のものとなった。一方、有馬へ帰された盛（さかう）は松浦へ帰ってきたため親（養父のほうのちかし）は困り、盛を有田の唐船城（とうせんじょう）に住まわせて自分は引退して宗金と称した。跡を親（隆信の実子のちかし）に譲ることをはっきりさせたということだろう。盛はこれを不満として永禄十年（1567）相神浦を攻めたが、松浦鎮信（まつらしげのぶ）が駆けつけ相踏原に盛を破った。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

永禄六年（1563）先述のように大村純忠（おおむらすみただ）は、武雄の後藤貴明（ごとうたかあきら）と結んだ重臣の叛乱にあい、大村を追い出された。これより前、後藤貴明は松浦隆信に援助を求め、隆信は「宮の前事件」でポルトガル船が大村領の横瀬浦に移っていたので貴明の申し出に応じ、また二男・惟明（これあき）を貴明の養子とした。純忠が謀叛に敗れ多良岳に逃れると、貴明は大村領であった佐世保、日宇、早岐、佐志方の地を隆信に献上した。翌永禄七年（1564）有馬尚純は兵船百艘を大村湾に派遣したが、隆信は篭手田左衛門、加藤源之助の兵船を差し向けこれを破った。さらに翌永禄八年（1565）大村純忠が早岐へ侵攻したため隆信は嫡子・鎮信を遣わしてこれを退け、針尾伊賀守は隆信に帰順した。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

なお、のちのことになるが、後藤家の養子となった後藤惟明は天正二年（1574）、養父貴明に謀叛を企て、敗れて平戸へ戻った。（新人物往来社「日本城郭体系17」）

さて、壱岐では既述のように文明四年（1472）、上松浦・岸岳城の波多泰（はたやすし）が壱岐を分割統治していた志佐（しさ）・佐志（さし）・呼子（よぶこ）・鴨打（かもち）・塩津留（しおづる）の五氏を急襲して追い出し、日高氏を置いて全島を領有していた。（亀丘城現地案内板、松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

天文十一年（1542）波多氏当主・盛（さこう）は嗣子のないまま没した。重臣の日高資らは盛の甥・隆をたてたが、盛の後室・真芳はこれに対し、有馬氏から藤童丸を迎えて跡継ぎとした。松浦隆信は盛の後室に対して非道を説いたが容れられなかった。隆信の母は上述のように波多盛の娘なので、盛の後室は隆信の義理の祖母ということになる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

ここで、後室が藤童丸を有馬から迎えたことについて、「日本城郭体系17」は弘治三年（1557）のこととしている。盛が死去して十五年後だ。（新人物往来社「日本城郭体系17」）

なお、藤童丸について「史都平戸－年表と史談－」は有馬晴純の子（二男）としているが、これは有馬義貞（ありまよしさだ）の二男の誤りだと思う。有馬義貞は晴純の嫡子で、安富入道徳円の娘を妻としていたが、のち波多壱岐守盛の娘を継室とした。そしてその二男が藤童丸で、のちに鎮（しげし）または親（ちかし）と名乗った。藤童丸の母（実母だろう）が波多盛の娘なので、その縁で波多家を継ぐことになったのだろう。フロイスは「日本史」の中で藤童丸について、「ドン・プロタジオの兄で波多殿という異教徒」であり、「もし他家を嗣いでいなければ彼が有馬殿となっていた筈である」と書いている。ドン・プロタジオというのは有馬晴信（ありまはるのぶ）のことだ。（外山幹夫氏「肥前有馬一族」）

ところで、波多盛の甥・隆は弘治元年（1555）、壱岐六人衆により殺されている。その経緯はよく分からないが、盛の後室の動きと関係しているように思える。（山川出版社「長崎県の歴史」）

また、盛の後室は日高資を毒殺した。まさに、やりたい放題という感じだ。資の子・喜（このむ）は大いに怒り永禄七年（1564）岸岳城を攻撃して後室と藤童丸を追い落とした。二人は草野鎮永（くさのしげなが）のもとに逃れた。ところが、盛の後室は烈女だったようで、永禄十二年（1569）龍造寺隆信と有馬氏の援助を受けて岸岳城を奪回する。日高喜は壱岐に逃れ、亀丘城（かめのおじょう）に拠った。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」） このとき喜は亀丘城の城代・波多政を討ち取って壱岐を押領したという。（秋田書店「日本城郭総覧」）

この前の年、永禄十一年（1568）日高喜は松浦隆信と誼を結んでいた。波多鎮（はたしげし＝藤童丸＝親ちかし）と義母による反攻の兆候があったのだろう。日高氏は壱岐に逃れたのち、元亀二年（1571）に松浦氏に従属した。（亀丘城現地案内板） 独力では壱岐を維持できないと判断したものと考えられる。日高喜は娘を松浦隆信の子・豊後守信實に嫁がせ、壱岐は平戸領となった。その翌年、元亀三年（1572）に波多氏は対馬の宗采女に援助を求め、宗は壱岐を攻めたが、日高はこれを撃退している。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

その後も壱岐は平戸藩の領地として幕末まで続いていく。平戸藩は亀丘城（かめのおじょう＝亀尾城）に城代と郡代を派遣して壱岐を治めた。明治に入って平戸藩が長崎県になったので、壱岐も長崎県だ。（亀丘城現地案内板）

ちなみに、藤童丸こと波多鎮（はたしげし＝波多親ちかし）はのちに豊臣秀吉から岸岳城を安堵されたが、文禄の役で改易され波多氏は断絶する。その領地は寺沢広高（てらさわひろたか）に与えられ、広高は唐津城を築いた。（吉永正春氏「九州の古戦場を歩く」）
この間、永禄十一年（1568）松浦隆信は剃髪し、道可（どうか）と号し、跡を嫡子の鎮信（しげのぶ）に譲った。これが平戸藩初代藩主の松浦鎮信（まつらしげのぶ）だ。ちなみに、松浦氏には父・隆信、子・鎮信という父子が二組あり、ヤヤコシイ。そこで法名をもって表すのが便利だ。「宮ノ前事件」の松浦隆信は道可、その子・鎮信が法印（ほういん）、法印の孫・隆信が宗陽（そうよう）、その子・鎮信が天祥（てんしょう）だ。
その早いほうの松浦鎮信は天正二年（1574）諫早の西郷純堯、武雄の後藤貴明とともに大村純忠を三城（さんじょう）に奇襲したが、敗れた。
のち天正十四年（1586）大村純忠は波多・有馬・宗・有田らと謀って早岐井手平などを攻めたが、松浦隆信・鎮信父子は海陸に出陣して撃退した。このとき、大村との間で重尾峠において両国の境界をさだめ、また純忠の娘を鎮信の子・久信（ひさのぶ）の室とすることで和睦した。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
翌天正十五年（1587）秀吉の九州征伐。松浦鎮信は、同年四月、筑後高良山（こうらさん）へ出向き秀吉に拝謁した。五月、秀吉が薩摩へ攻め入るにあたり、松浦鎮信は海上を警備しつつ船奉行の九鬼嘉隆（くきよしたか）・脇坂安治（わきさかやすはる）・加藤嘉明（かとうよしあきら）を先導した。九鬼らは島津方の桂忠明が籠もる平佐城（ひらさじょう）を船筏で包囲した。川内川を遡ったということだろう。そして島津義久は川内の泰平寺（たいへいじ）に出向き降参した。（「北肥戦誌」）
松浦道可（隆信）・鎮信父子は秀吉から所領を安堵され、同年、伏見に邸宅を賜っている。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
天正十九年（1591）鎮信と対馬の宗義智（そうよしとも）は秀吉に招かれ、鎮信の献じた朝鮮の地図によって渡海作戦を練った。秀吉は鎮信に、領国内の壱岐に勝本城を築くことを命じた。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
秀吉が勝本城築城を命じたのが天正十九年（1591）九月、有馬晴信・大村喜前（おおむらよしあき）・五島純玄（ごとうすみはる）に支援させ、同年中に完成したという。（新人物往来社「日本城郭体系17」）
翌文禄元年（1592）朝鮮出兵。松浦鎮信は兵三千を率いて小西行長軍に所属した。やや遅れて子の久信も出陣した。忠州・平壌の戦いでは敵の大軍に対し火牛の計を用いるなど奮戦したという。平壌戦ののち、敵は沈惟敬を使いとして講和を申し入れたが、鎮信はこれが偽りであることを見抜いて小西行長に諫言したものの容れられず、後日、明の大軍が押し寄せたことで鎮信の慧眼を知らしめたそうだ。慶長元年（1596）和議が整い、加藤清正、小西行長等は帰国したが、鎮信は釜山で警備にあたった。
のち慶長三年（1598）鎮信・久信父子は帰国、その際朝鮮人の陶工約百名を連れ帰り、中野焼を始めさせたという。
翌慶長四年（1599）、鎮信は日の岳城（ひのたけじょう）を築いた。日の岳は朝日岳、亀岡とも称し、当時の居城・白狐山城（つまりここで紹介している勝尾岳城）の東方600mの海に突き出た小山で、鎮信の父・隆信が生前築城を考えていたという。今の平戸城が建っているところだ。鎮信は朝鮮から帰ると直ちに築城に取り掛かり、不要となった名護屋城の建物なども利用した豪華な城であったそうだ。家臣を城下に集め、商家は茅葺き屋根を板屋葺きに改めさせたというので、築城とともに居城を移したと思われる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
日の岳城に居城を移したのちの勝尾岳城については、よく分からない。そのまま廃城になったのではないだろうか。
翌慶長五年（1600）関ヶ原の戦い。松浦鎮信は、当初は石田三成方につこうとして出征したが、赤間関（あかまがせき＝今の下関市）において大村喜前（おおむらよしあき）・五島玄雅（ごとうはるまさ）らと密議をこらし、東軍か西軍か、あるいは領国に引き篭もるか、談じた。このとき、同国の将・寺沢広高の動向が注目されたという。広高は東軍として関ヶ原に参陣している。鎮信らは領国へ引き返していたようだ。（別冊歴史読本「野望！武将たちの関ヶ原」）
結局、鎮信は関ヶ原には参加していないが、西軍に与しなかったことを嘉賞されたという。家康からだろうか。翌慶長六年（1601）鎮信は東上して家康に拝謁し、旧領六万三千二百石を安堵された。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
同年、鎮信は家督を息子の久信（ひさのぶ）に譲った。ところが、久信はその翌年、慶長七年（1602）伏見の邸において死んでしまう。三十二歳であった。鎮信はさぞ落胆したことだろう。久信の子・隆信（たかのぶ＝宗陽）はその翌年、慶長八年（1603）十三才で元服し、鎮信に伴われて駿府に出向き、家康に謁して家督を認められた。
慶長十四年（1609）オランダ船がはじめて平戸に入港した。これより先、慶長五年（1600）にオランダ船「リーフデ号」が豊後に漂着し、その航海長のイギリス人、ウィリアム・アダムスは三浦按針（みうらあんじん）として家康の顧問となっていた。のち、「リーフデ号」船員たちを帰国させるにあたり、松浦鎮信は家康に請い西洋渡航の朱印を受け、銀十五貫を投じて船を造って慶長十年（1605）彼らをマレーのパタニへ送り届けた。オランダはこの好意に報いるため、国王の書を携えた商船二艘を平戸へ派遣した。これが慶長十四年（1609）平戸へ入港したわけだ。鎮信はさっそくオランダ国王の書簡を家康へ送り、正式な通商許可を得て、同年平戸にはじめてオランダ商館が設置された。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
ウィリアム・アダムスこと三浦按針（みうらあんじん）はその後、平戸にイギリス商館が設置されることにも力を発揮したという。元和六年（1620）平戸で病死した。（「三浦按針墓」現地案内板）
慶長十七年（1612）松浦隆信が従五位下肥前守に任ぜられた。しかし、その口宣案の宛先には「豊臣隆信」と書いてあったという。拙者はこのことがきっかけとなったと考えているが、翌慶長十八年（1613）鎮信は居城・日の岳城を焼き捨てた。豊臣大名と目されていたことから徳川の嫉視を避けるためといわれている。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
松浦鎮信は、それ以降は城を構えず中之館（なかのたち）を居館とし、ついで御館（おたち）に移った。ただ、中之館（中之御館とも）から御館へ移った時期は不明だ。また中之館の場所も現在の平戸市保健所付近という口伝がある程度で、その規模も遺構も全く不明だそうだ。（新人物往来社「日本城郭体系17」）

ということで、松浦隆信は居館を御館（おたち）に移した。ここから先の松浦氏については、御館ページに譲ることにしよう。

■御館概要

御館は、肥前松浦藩六万石の居館だ。松浦藩といえば平戸城で、今では平戸の観光スポットとなっている。
しかし、松浦藩が平戸城を居城としたのは、江戸時代も元禄のころ、宝永四年（1707）以降のことで、それより以前はここで紹介する御館を居館としていた。
松浦氏は源久が始祖といわれ、肥前松浦郡一帯に多くの分家を排出し、松浦党（まつらとう）と呼ばれた。のちに松浦藩をひらく松浦氏は、この松浦党の分家のひとつ、峯（みね）氏の末裔だ。
小値賀（おぢか）にいた峯持（みねたもつ）が嘉禄元年（1225）頃、平戸へ移り、館山に居を構えた。これが平戸松浦氏へとつながっていく。居館をおいた館山というのは、今の松浦史料博物館の裏山だといわれている。ということは、御館の裏山だ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
のち南北朝のころ、峯勝（みねすぐる）は北朝に仕えて滝口に補されている。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
滝口というのは、天皇を警固する武士のことで、御所の清涼殿の東庭北方に屋根の水が滝のように落ちる場所に控え所があったため、そう呼ばれるようになったそうだ。（神尾正武氏「松浦党戦旗」）
また、峯勝（みねすぐる）は平戸の勝尾岳に白狐山城（びゃっこさんじょう＝勝尾岳城）を築いたという。これ以降、勝尾岳城（白狐山城）が平戸氏の居城となった。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
戦国末期、松浦隆信（まつらたかのぶ＝道可どうか）はポルトガルとの貿易を積極的に行ない、平戸は全国から商人があつまり賑わった。また、松浦一族との争いを勝ち抜き、近隣の大村氏などとも戦い、戦国大名としての地位を築いた。
永禄十一年（1568）松浦隆信は剃髪し、道可（どうか）と号し、跡を嫡子の鎮信（しげのぶ）に譲った。これが平戸藩初代藩主の松浦鎮信（まつらしげのぶ）だ。ちなみに、松浦氏には父・隆信、子・鎮信という父子が二組あり、ヤヤコシイ。そこで法名をもって表すのが便利だ。戦国大名・松浦隆信は道可、その子・鎮信が法印（ほういん）、法印の孫にも隆信があり宗陽（そうよう）、その子が鎮信で天祥（てんしょう）だ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
天正十五年（1587）秀吉の九州征伐。松浦鎮信は、同年四月、筑後高良山（こうらさん）へ出向き秀吉に拝謁した。（「北肥戦誌」）
七年の滞在を経て朝鮮出兵から帰国した松浦鎮信（まつらしげのぶ＝法印ほういん）は、その翌年の慶長四年（1599）、日の岳城（ひのたけじょう）を築き、居城を勝尾岳城（白狐山城）から移した。日の岳城は今の平戸城と同じ場所にあった。
慶長五年（1600）関ヶ原の戦いでは、松浦鎮信は領国に引き篭もっていたようで参加していない。翌慶長六年（1601）鎮信は東上して家康に拝謁し、旧領六万三千二百石を安堵された。同年、鎮信は家督を息子の久信（ひさのぶ）に譲った。ところが、久信はその翌年、慶長七年（1602）伏見の邸において三十二歳の若さで死んでしまう。鎮信はさぞ落胆したことだろう。久信の子・隆信（たかのぶ＝宗陽）はその翌年、慶長八年（1603）十三才で元服し、鎮信に伴われて駿府に出向き、家康に謁して家督を認められた。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
慶長十四年（1609）オランダ船がはじめて平戸に入港した。これより先、慶長五年（1600）にオランダ船「リーフデ号」が豊後に漂着し、その航海長のイギリス人、ウィリアム・アダムスは三浦按針（みうらあんじん）として家康の顧問となっていた。のち、「リーフデ号」船員たちを帰国させるにあたり、松浦鎮信は家康に請い西洋渡航の朱印を受け、銀十五貫を投じて船を造って慶長十年（1605）彼らをマレーのパタニへ送り届けた。オランダはこの好意に報いるため、国王の書を携えた商船二艘を平戸へ派遣した。これが慶長十四年（1609）平戸へ入港したわけだ。鎮信はさっそくオランダ国王の書簡を家康へ送り、正式な通商許可を得て、同年平戸にはじめてオランダ商館が設置された。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
慶長十七年（1612）、松浦隆信が従五位下肥前守に任ぜられた。しかし、その口宣案の宛先には、わざわざ「豊臣隆信」と書いてあった。このことがきっかけとなったと思うが、翌慶長十八年（1613）、松浦鎮信は居城・日の岳城に火をかけ、自ら焼き捨てた。理由は、嫡子・久信が若死し絶望したためともいわれるが、徳川の嫉視を避けるためともいわれている。後者と考えている。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
こうして、居城が焼失したわけだが、それ以降は城を構えず中之館（なかのたち）を居館とし、ついで御館（おたち）に移った。ただ、中之館（中之御館とも）から御館へ移った時期も理由も不明だ。長くても十四年程度の短い期間しか中之館にいなかったという説もある。また中之館の場所も現在の平戸市保健所付近という口伝がある程度で、その規模も遺構も全く不明だそうだ。（新人物往来社「日本城郭体系17」）
ところで、中之御館の「中」というのは、御館を居館としていた時期にとってみれば、先の居館（居城）が日の岳城で、今の居館が御館で、その間に挟まれた短い期間の居館が「中」之御館という意味だろう。中先代の乱の「中」と同じ用法だと思う。
ということで、松浦隆信は居館を御館（おたち）に移した。現在、松浦史料博物館がある場所であり、今も立派な高石垣が残っている。ただ、この石垣が御館時代のものか、明治時代のものか不明という。御館のあった場所は明治二十七年（1894）松浦家の私邸が建てられ、昭和三十年（1955）に松浦史料博物館に寄贈されている。（新人物往来社「日本城郭体系17」）
御館が藩主の居館であったのは、平戸城が築かれるまでの約九十年間のことで、この頃がもっとも蘭英貿易が盛んで華やかな時代だったそうだ。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）
オランダについては先述したが、イギリスとの貿易の始まりは鎮信が日の岳城を焼いた慶長十八年（1613）で、イギリス船「クローブ号」がイギリス国王の書を携えて平戸へ入港したことに始まる。鎮信と隆信は、四十艘の船で沖合い900mまで出迎えたという。「クローブ号」の司令官・セーリスはウィリアム・アダムス（三浦按針）とともに江戸へのぼり家康に拝謁して正式に通商の許可を得た。幕府は浦賀を貿易港とすることを望んだが、セーリスは平戸に商館を構えた。こうして平戸にオランダとイギリスの二つの商館が設置され、それぞれ貿易を行ったが、両国の競争は激しく紛争は絶えなかったという。イギリスの貿易品は西洋の品が多く高価であったのに対して、オランダは東南アジアで仕入れた諸国の品をもって薄利多売を行ったので、次第にイギリスは圧倒された。また商館の経費が東印度会社から削減されたことなどあり、ついに元和九年（1623）イギリス商館は閉鎖された。平戸でのイギリス貿易はわずか十年だった。

平戸貿易はオランダの独占するところとなったが、寛永十四年（1637）島原の乱が起こった。幕府は一揆を支援したポルトガル人を追放するとともに、島原の乱を鎮圧した松平伊豆守信綱（まつだいらのぶつな）に島原からの帰途、平戸を調査させた。信綱はオランダ人の砲術の優秀さと商館の堅牢さを危険と判断し幕府に報告ししたため、幕府はオランダ商館の破壊を命じた。寛永十八年（1641）オランダ商館は長崎の出島へ移った。こうして平戸は元の淋しい町に戻ったという。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

この間、寛永十四年に松浦隆信（宗陽）が没し、子の鎮信（天祥）が跡を継いだ。松浦鎮信は山鹿素行（やまがそこう）と親交があり、砂型を使って素行と築城用兵について研究したといわれる。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

松浦鎮信と山鹿素行は気があったという。素行の弟・平馬（へいま）は平戸藩士となり、のち家老となった。寛文六年（1666）素行が幕府から咎められ赤穂（あこう）に流罪となると硯や筆を送って慰め、また幕府に赦免を働きかけた。素行が許されると江戸の住まいを鎮信が斡旋したそうだ。その後、素行がもてはやされると、再び幕府の咎めを受けそうになったので、鎮信が陳情書をもって老中の間をまわって事なきを得た。そういう付き合いがあって、鎮信が新たに築く城の縄張りを山鹿素行が行ったといわれている。この新城が平戸城だ。（小学館「城郭と城下町9」）

幕府に対する平戸城の築城願は、鎮信の子・棟（たかし）のとき元禄十六年（1703）に提出され、その四日後に許可がおりているが、実は松浦鎮信のときに築城許可があったのだという説がある。たしかに許可が出るのがわずか四日間というのは、あまりにも早すぎると思う。（新人物往来社「日本城郭体系17」）

それより前の元禄二年（1689）鎮信は致仕し、その跡を子の松浦棟（まつらたかし）が継いでいた。棟は久々の一字名だ。ちなみに鎮信は平戸城築城許可を得た元禄十六年（1703）に没した。（松浦史料博物館「史都平戸－年表と史談－」）

しろゆきぶり（城一覧）より

http://www16.ocn.ne.jp/~sironoki/index.html